

後魏柔然表（上）

——中古蒙古史の編年史的整理の意圖をかねて——

内田吟風

蒙古史上、西曆第五・六世紀が、柔然（蠕蠕・芮芮・茹茹）民族支配の時代であつたことは、今更云ふ迄も無い。而して當時の蒙古の歴史は、魏書蠕蠕高車傳^{*}に據つて略々之を窺ふことが出来る。然し該傳は其叙述に當つて往々精確なる年時を記して居らぬ場合が尠くない。又歴史事件の顛末に關し詳密ならざる點も一二に止まらぬ。又柔然族自體の事件であつても之が例へば西域地方の事に係る場合は之を西域傳に譲つて全く觸れてゐない場合もあつて、該傳のみにては到底當時の蒙古史全般は勿論、柔然自體の歴史も之を完全に把握することはできない。従つて吾々は更に魏書・北史の紀傳志の各部、或は南齊書・梁書の芮芮傳其他多數の古史料について之が考察を要することは論を俟たぬ。これ茲に柔然族に關する諸記録を採輯網羅して、後魏柔然表をなせる所以である。勿論その史料が總て支那史料である關係上、題名にも示した如く其れは後魏と柔然の交渉史が中心となるものであるが、然し一面、直接柔然族に關係無きも當時蒙古の地に發生せる諸歴史事件に關しても、努めて之を附載し、以て從來未だ必ずしも充分に開拓されたとは謂ひ得ない中古蒙古史の編年史的整理ともいふべきことに資する處あり度いと念願した。

而して、柔然民族の源流・名稱・習俗等々に至つては近く印刷に附せらるゝ豫定である「柔然族史序説」なる

一小篇に於て若干の卑見を陳べたところであつて、本篇と併讀せらるゝを得ば幸甚である。

尙、本篇が筆を天興五年に起したのは、其以前に於ける柔然族の勃興過程については既に上述「柔然族史序説」に於て述べたからに外ならぬ。又、中古蒙古史の編年史的整理といふ立場の上から、高車・契丹・庫莫奚等の諸族の歴史的事件も成る可く詳細に之を附記する様にとめたが、然し吐谷渾氏羌乃至所謂五胡僭偽諸國の國內事件等については殆ど之を除外した。

又、本文中に於ける當時の蒙古内諸地名の比定については、既に丁謙氏の「魏書外國傳補地理攷證」白鳥庫吉博士「弱水考」等に於て既に明瞭にされたものが尠くなく、又卑見を加へ得たものも若干あるが、之等は記事了解の上重要と思はれるもの、外は本文中に一々註記せず、篇末に一括列舉して参照の便に供した。

尙又柔然と魏との欄を別にしなかつたこと、或は又文中、魏帝魏塞と云ふべきを屢々單に帝・塞と稱したこと、北方防禦と關係ありと思はるゝ魏帝の頻繁なる漠南陰山巡狩等を收録しなかつたこと、等はすべて全く印刷の便利を考慮してのことに過ぎぬ。

* 北齊魏收原著の魏書該傳は夙に亡缺して、現行本魏書該傳は北史蠕蠕高車傳に據つて補つたものであるが〔拙稿「魏書の成立について」(東洋史研究二の六) 参照〕、猶兩者間には若干の差異がある。本篇では便宜上魏書のそれを用ひ特に北史のそれと注意すべき異同ある所は特記することとした。魏書中他の諸紀傳についても同斷である。

北魏天興五年(柔然丘豆伐可汗社崙即位元年・西紀四〇二)

十二月、柔然丘豆伐可汗社崙、後魏道武帝が後秦姚興を撃つと聞き、塞を犯し、參合陂に入り、南、善無に至る。道武、常山王遜を遣し、萬騎を以て之を追はしむ。及ばずして還る。魏書蠕蠕傳
及本紀***

* 北史蠕蠕傳が丘豆伐に作るは錯簡と思はれる。魏書傳に「丘豆伐、猶魏言駕取開張也」と記し、白鳥庫吉博士(東胡民

族考第十)は丘豆を蒙古語 *kyidai* (指揮す、處理す)、伐を *ladar* (開張す、擴大す)の音譯となし、藤田豊八博士(蠕蠕の國號及び可汗號につきて)は丘豆伐を以て *küelhai* (手綱・統制)に比定せり。尙、社崙が丘豆伐可汗を稱したのが天興五年なることは「柔然族史序説」に叙述せり。

* 此年五月、北魏・後秦の間に戰鬪開始され、道武は自ら軍を率ゐて汾東柴壁に秦軍を破り、まさに蒲坂に進攻せんとしたが、會々柔然、魏を伐つを謀ると聞き、軍を班し、十二月雲中に還る。果して同月社崙の入寇があつたわ

けである。「北史魏書本紀羌姚傳・通鑑晉紀卅四・晉書後秦載記」。此の社崙の入寇が後秦救援の爲に北魏の北東面を衝いたものであることは當時に於ける社崙と姚興との友好關係より、容易に推察せられる〔拙稿「柔然族史序説」參照〕。

*** 以下魏書北史の本紀・蠕蠕傳に依據せる場合は、多くは一々之を註記せぬこととする、又以下單に何紀・何傳とせるのはすべて魏書のそれである。

天興六年（社崙 二年・四〇）

十月、北魏道武帝、將軍伊謂に詔し騎二萬を帥ゐて高車の餘種を襲はしむ。十一月、伊謂、高車の袁紇・

烏頻部を破る。高車傳・天象志一

* 高車諸部は前に登國四、五年、天興二年道武の大破するところ、又去年天興五年には柔然社崙の多く攻併するところとなつてゐた。

天賜元年（社崙 三年・四〇）

四月、社崙の從弟悅代・大那等、社崙を殺して大那を立てんと謀りて事發覺、北魏に奔る。北魏、大那を以て冠軍將軍西平侯と爲し、悅代を越騎校尉易陽子と爲す。***

○是歲、燕帝慕容熙・北・契丹を襲ひ、大に之を破

る。晉書載記

* 魏書太祖紀、代を伐に作る。今魏書・北史兩蠕蠕傳及び通鑑晉紀卅五、代となすに従ふ。

* 崔浩は當時「蠕蠕子弟來降、貴者尙公主、賤者將軍大夫、居滿列朝」と謂つたが、閼大肥・閼毗等の傳には、其實例數多く見出される。閼毗の妹の如きは文成帝の母であり、景穆恭皇后と追尊されてゐる。魏が柔然に對して武力對抗をなす一方、大いに其懷柔にも意を用ゐてゐたことが知られる。

天賜三年（社崙 五年・六〇）

夏四月、社崙、魏邊を侵す。夜魏、兵を召集せしも、旦に及び柔然軍去りしを以てやむ。蠕蠕傳・太祖紀・天象志二

○是歲、燕帝慕容熙、苻后と契丹を襲ふ。其衆盛を憚り果さずして還る。記載

天賜四年（社崙 六年・七〇）

社崙、馬八千匹を秦姚興に獻す。秦の安北將軍五原公劉勃勃即ち匈奴興に畔き途に擁して之を奪ふ。載記・賀狄千

* 晉書載記に河西鮮卑社崙とあるは社崙の誤なる事千傳の記事によりて明かである。賀狄千傳によれば此時、秦が魏と和せるを忿りて此行をなす、尙、載記は此事件を晉の義熙二年即ち天、

るが前後の事情より見て、是は勃勃が秦に叛いて大夏天王
大單干を稱した天賜四年の事とすべきである。通鑑亦四年
となしてゐる。

永興元年（社崙 八年・九〇）

十二月、柔然魏邊を侵す。

永興二年（社崙 九年・藹苦蓋可汗斛律 元年・〇一）

春正月、魏の南平公長孫嵩等兵を將ゐて、柔然を伐

つ。五月、長孫嵩等漠に至りて還る。柔然追ひて之を

牛川に圍み、明元帝、衆を率ゐ之を救ふ。社崙 聞き

て遁走、道に死す。其子度拔、幼。部衆、社崙の弟斛

律を立つ。藹苦蓋可汗と號し、北賀術也骨國を併し、

東暨曆辰部を破る。天象志 一・二・三

* 魏言・資質美好也（傳）。白鳥博士（上掲書）は蒙古語

čaga（風習性質資質）の原形古音を yak, yag と做し、

藹苦は之が音譯と考へ、蓋は čuva（美好）の音譯とした。

藤田博士（上掲書）は之を ukagun, ukhaga（智慧・聰明）

に比定せり。

* 骨國とは、梁書・南史に「元魏之居桑乾也、滑稽小國
屬芮芮（柔然）」と見ゆる處の滑即ち嚙嚙（エフタル）のこ
とであらう。

永興三年（斛律 二年・四一）

柔然可汗斛律、遣使、馬三千匹を北燕馮跋に
跋の女樂浪公主を娶らんことを求む。乃ち跋、公主を
以て之に妻す。晉書 載記

○庫莫奚虞出庫眞三千餘落を率ゐて北燕に交市を請
ひ馬千匹を獻ず。燕之を許し、之を營邱におく。記載

十二月、斛律の宗人悅侯、咄觚干等數百人魏に降る。

斛律、自守し以後數年魏を侵さず。

* 晉書載記は蝟蛄勇斛律と書す。之が柔然可汗斛律なるは
論する迄もない。（通鑑亦柔然可汗斛律となし、是年の七月
にこの事件を繋けてゐる。）勇は當時北族一般の部酋號莫
弗（バガツール勇者）の意譯で、斛律は北燕に對し可汗號
を避けて莫弗と云つてゐたのであらう。

* 馮跋は此求婚を群臣に議せしめ、異論あつたが、遂に
其遊擊秦都をして騎二千を率ゐて公主を送つた。以て柔然
の北方諸國間に重んぜられたことを知る。

* 北史蝟蛄傳は咄觚干等百數十人に作り、魏書本紀は
吐觚干等百余人に作る。今、假に魏書蝟蛄傳に従ふ。

神瑞元年（斛律 五年・牟汗紇升蓋可汗大檀元年・四一）

斛律、女をもつて北燕の馮跋に嫁せしめんとす。斛
律の長兄の子、步鹿眞、柔然の大臣樹黎・勿地延等に
詐り告げて曰く「斛律、汝黎等の女を媵として燕に送

らんと欲す」と。黎等恐れて遂に勇士をして夜、斛律の穹廬の傍に伏さしめ、出づるを伺ひて、之を執へ、女と共に燕に送る。斛律、燕都和龍に至る。馮跋封じて上谷侯と爲し、傳蠕蠕客禮を以て遇し、女を昭儀とす。記載

樹黎、步鹿眞を立て、可汗とし、自らが相となる。

後、步鹿眞、社崙の子社拔と共に大人(部)叱洛侯なる者の家に至り、其小妻と淫す(叱洛侯、もと高車族人。高車渠帥に叛して社崙と通じ、之を導きて。高車諸部を破り、其功を以て大人となる。)小妻、步鹿眞に告げて曰く、「叱洛侯、大檀を奉じて主と爲さんと謀る」と。步鹿眞、之を聞き、歸りて八千騎を發し、叱洛侯を圍む。叱洛侯其珍寶を焚き、自刎して死す。步鹿眞又兵を引いて大檀を襲ふ。大檀逆擊、步鹿眞及社拔を執へて之を殺し乃ち自立す。

大檀は社崙の季父オヂ僕渾の子、先に別部を統して柔然の西界に鎮し、素より衆心を得たり。立ちて牟汗紇升蓋* * *可汗と號す。

秋八月魏、謁者悅力延を遣して柔然を撫慰す。十二月、可汗大檀衆を率ゐて南徙、魏塞を侵す。明元帝之を親討、大檀遁走す。帝、山陽侯奚斤を遣して之を追

ふ。大雪に遇ひ、士卒凍死、指を墮すもの十に二三。奚斤傳 天象志

○是歲前後、契丹・庫莫奚諸部頗る北燕馮氏に降附す。北燕、之等大人を署して歸善王となす。海夷馮跋 傳・載記

* 斛律の放逐に就て、載記は「蠕蠕斛律爲其弟大但所逐、盡室奔跋」と記してゐるが、大但(大檀)を斛律の弟とするは從弟の誤であり、又大檀が直接斛律を逐ふたとするのも誤と考へられる。若し大檀が直接斛律を放逐せるものならば、其後(泰常元年)斛律が僅の兵を率ゐて歸國せんことを馮跋に請ふわけではない。恐らく斛律は自分を逐うた步鹿眞が大檀の手によつて殺されたことを聞いて歸國を思ひ立つたのであらう。

* * 傳に曰く「制勝也」と。藤田博士(上掲書)は牟汗紇は、muklige mukhoga(全勝すること・絶滅すること)、升蓋は、…好みなる意を附する接尾語と見做せり。即ち「完勝を好むの人」の意となせり。

神瑞二年(大檀 二年・五一)

○三月、河西の饑胡、上黨に屯聚し白亞栗斯を盟主とし、魏に叛す。自ら單于と號し建平元年と稱す。司馬順宰之が謀主たり。四月、魏將公孫表等五將之を討つて克たず。衆、栗斯を廢し、劉虎を立て率善王と號

天象志二・叔孫建傳、
靈徵志上・崔玄伯傳、

魏、霜旱、鄴に遷都せんと議あり。博士祭酒崔浩

等、遷都せば夏赫連氏氏 柔然必ず提挈して北境を侵すべ

し等の事を論じ、遷都の議やむ崔浩傳・周澄 傳・食貨志

泰常元年（大檀 三年 六一）

○九月、魏の前并州刺史叔孫建等、叛胡劉虎等を征し、斬首萬餘級、虜十萬餘口、之を平定す叔孫建・崔浩傳

柔然前可汗斛律、燕王馮跋に塞北に還らんことを請ふ神瑞元年・之條參照 跋曰く「棄國萬里、又内應するもの無し、若し強兵を以て相送らば、糧運繼ぎ難し、又兵少ければ勢固き能はず。且つ千里國を襲ふ、古人難しと爲す、況や數千里をや」と。斛律固請して曰く「大衆を煩さず、願くは騎三百を給せらるれば足らん。勅勒の國に達するを得ば、民必ず欣び來り迎へん」と。乃ち之を許し、單于前輔燕・單于左右前後四輔の官を備ふ 萬陵を遣し、騎三百を率ゐて之を送らしむ。陵、遠役を憚り黑山に至り斛律を殺して還る記載

魏の都將閼大肥、禁兵を領して柔然を撃ち、其大將

莫孤渾固大・肥傳を獲

* 勅勒は即ち高車である〔魏書高車傳〕。茲では恐らく柔然

に服屬してゐた其部族を指したものであらう。

* 載記は此事件の年時を明記してゐない。通鑑は是を斛律の放逐と同年なる神瑞元年に繋けてゐるが、今は屠本十六國春秋及び湯球氏同輯本の繫年に従つた。柔然の中心地たる漠北オルホン河畔と燕都和龍〔熱河朝陽〕との距離に徴するも之を神瑞元年に置くのは妥當でない。

* 閼大肥、本柔然人、太祖の時宗族を率ゐて降り、華陰公主に尙す。この出撃、傳に泰常初とあり、今、元年に繋ぐ。

泰常二年（大檀 四年・七一）

可汗大檀、北燕に使を遣し、馬三千匹、羊萬口を獻す記載

* 載記は此事件の年時を明記せず。今、屠本十六國春秋及湯球氏同春秋輯本の繫年に従ふ。

泰常三年（大檀 五年・八一）

春正月、魏の高車中郎將薛纂、高車丁零十二部大人酋の衆を率ゐて北征、弱水シラム河に至る。降者二千餘人、牛馬二萬餘頭を獲

* 此の征行が何族を討てゐるものかは明かでない。

泰常八年（大檀 十年 四二）

正月、柔然、魏邊に寇す。二月、魏長城を長川の南

に築く。赤城より、西、五原に至る。延袤二千餘里、戍卒を備置し以て柔然に備ふ。*天象志三。

夏四月、北涼匈奴沮渠の晋昌太守唐契、弟和・甥李寶等を率ゐて伊吾新疆哈密に奔り、西涼李氏の遺民を招集す。

歸附するもの二千餘家。遂に柔然に臣屬す。*柔然、契

を伊吾王とし、八月河西北涼沮渠を攻め、沮渠蒙遜の世子政德等を殺す。魏書唐和・李寶傳・宋書氏胡傳・通鑑宋紀一

十一月、魏の明元帝殂す。大檀聞きて大いに喜ぶ。

是頃烏孫、柔然のために逐はれて葱嶺山中に徙る。

又西域悦般國、柔然と好を結び、其王、衆數千人を率ゐて柔然國に入り、大檀と面見せんとす。途次、柔然の民が衣を洗せず髪を絆せず手を洗はず、婦女器物を舌舐するを見る。王其從臣に謂つて曰く「汝等我を誑いて此の狗國中に入らしむ」と。乃ち馳還す。大檀遣騎、之を追ふて及ばず、是より相仇讎、屢々、相征討す。西域傳

*漠北に、興り沙漠を家とした北魏拓跋氏は今や長城を築いて塞北大磧の地を棄て、柔然の跳梁に委ぬるに至つた。爾後北魏は屢々柔然を討つたが、之は其南侵を懲さん爲で蒙古地方を版圖に復さんとするものではなかつた。北魏の支

那的國家體制完成に於て此の長城築造は一重要事件たるを失はぬ。

*沮渠氏は西涼李氏を亡し、西域地方に勢力を延し遂に西域三十六國は沮渠蒙遜に臣稱して朝貢するに至つたが、其晋昌太守唐契は前年十二月、沮渠氏に叛した。然し沮渠氏の軍に敗れた爲、遂に此年伊吾に逃れたのである。柔然の西境は社崙の時より焉耆の北に及んだ。即ち天山の北なる準噶爾地方は早くより其勢力範圍であつた譯であるが、更に漸く此頃より其勢力は天山南路に及ぶこととなつたと思はれる。

始光元年（大檀十一年・四二）

秋八月、大檀六萬騎を率ゐて雲中に入り、吏民を殺掠し盛樂宮を攻陷す。魏の太武帝親*輕騎を率ゐて之を討ち、三日二夜にして雲中に至る。柔然騎、世祖を圍むこと五十餘重、騎馬首に逼り相次すること堵の如し。魏の士卒大いに懼る、帝顔色自若、衆情乃ち安す。魏の軍士、大檀の別部帥於陟斤を射殺す。大檀恐れて去る。於陟斤はさきに社崙と國を争ひて魏に降れる大那の子。〔天賜元年の條參照〕魏將長孫翰・尉眷等參合陂より北進し祚山に柔然別帥阿伏干を撃ち歌刪山に柔然別帥便度の弟庫仁を撃ち、更に北して柔然別帥莫孤が高車騎五千乘を率ゐて逆撃するを撃つて之を破る。斬首數千級。獲馬萬餘匹。長孫翰尉眷傳

魏帝、尙書令劉潔が「太檀前敗を懼れず必ず復た來らん、收田訖るの後、大舉征討すべし」との言を然りとし、九月大いに兵を東郊に治し、五萬騎を諸軍に分編し、北討の準備をなす。十二月魏の平陽王長孫翰東平公娥清等長川に出で、大檀を撃ち、魏帝自ら祚山に屯す。大檀北走、魏軍追撃大獲して還る。長孫翰・劉潔・娥清傳

● * 本紀には「緒陽子尉普文率輕騎討之」とて帝の親征を記してないが、通鑑考異も蠕蠕傳・北史本紀に據つて親征の行はれたことを認めてゐる。尙、長孫翰傳にも亦「大檀之入寇雲中世祖親征之」の句がある。

* * 通鑑攷異は此の翰清傳に見ゆる出撃を始光二年十月の出撃と混同した爲、長川とあるのは誤と爲してゐるが、之は妥當でなく、本篇の通り解すべきである。元來この前後の柔然・魏の交渉は複雑であつて事件の混同を來し易いが、本篇は之を出來得る限り妥當に整理するやう努めた。

始光二年（大檀 十二年・四二）

冬十月、魏大舉柔然を伐ち、五道並び進む。長孫翰等は黑漠よりし、汝陰公長孫道生・尉眷等は白黑兩漠の間よりし、魏太武帝は中道よりし、娥清は栗園に出で、宜城王奚斤・將軍安原・閭大肥等は西道より爾寒山に出づ。諸軍沙漠の南に於て輜重を捨て輕騎十五日

の糧を携へ沙漠を越えて之を撃つ。大檀部落大驚北遁し、魏軍大捷大獲して還る。長孫翰・尉眷・長孫道生・婁清・安原・閭大肥傳

始光三年（大檀 十三年・四三）

魏の太武帝、夏赫連氏・柔然の何れか先づ撃つべきと議す。長孫嵩・長孫翰・奚斤等皆曰く「赫連居士未だ患をなす能はず。柔然は世々邊害をなす、宜しく先に撃つべし。もし大兵追及し得ば則ち其畜産を收め、以て國を富ますに足り、追及し得ざるも陰山に獵して多く其禽獸を殺さば皮肉筋角は以て軍費を充すべく、亦一小國を破るにまさらん」と。崔浩曰く「柔然は遷徙鳥の飛ぶ如く、大兵を擧げて追はゞ追及し得ず、輕兵急追せば敵を制し難し。赫連氏土地千里に過ぎず、其刑政殘虐なり。宜しく先づ之を撃て」と。劉潔・安原

は馮跋北燕を先づ平げんことを請ふ。長孫嵩・劉潔・崔浩傳・通鑑宋紀二

始光四年（大檀 十四年・四四）

五月、魏帝夏國赫連昌を親征す。將軍陸俟をして諸軍を督して大磧陰山北麓に鎮せしめ、以て柔然に備ふ。陸俟傳

秋七月、柔然、魏の雲中を侵す。魏の既に赫連昌を破るを聞き、懼れ還走す。

○是年、丁零の民楊道なる者、北燕に至つて降る。

楊道はさきに白鹿山に獵して契丹に獲られ、塞外を射獵しつゝ流漂すること多年、大難の北、大黎國等を経歴し、遂に北燕に入れるものなり。十六國春秋
(御覽所引)

* 拙稿「柔然族史序説」參照

神鼎元年(大檀 十五年・四二)

八月、大檀、其子を遣し萬餘騎を將ゐて魏邊を侵し、邊民を殺掠して去る。魏に降附せる高車族追撃して之を破る。魏帝廣寧より還り追ひしも及ばず。

神鼎二年(大檀 十六年・勅連可汗吳提元年・四二)

夏四月、魏帝兵を南郊に練し、將に柔然を撃んとす。朝臣内外盡く行を欲せず。保太后太武の保母竇氏固く之

を止む。崔浩獨り之を勸む。尙書令劉潔等、太史令張淵・徐辯を推して、帝に天象星占より其不可を云はしむ。崔浩之を駁し、又、淵辯が柔然征討を不要なりと云を難じて曰く、「蠕蠕は是國家北邊の叛隸、今其の元惡を誅し、其の善民を收め舊役に復さしむ、無用に非ざる也。漠北、高涼にして蚊蚋生ぜず、水草善美、夏は北遷して田牧す、其地耕して食す可らざるに非ず。蠕蠕の子弟(魏に)來降するや、貴なるは公主に尙し、賤なるも將軍大夫に拜されて朝に滿つ。高車又名騎と

號さる。(荒外の民と雖亦)臣として蓄ふ可らざるものに非ざる也」と。帝、浩の議を是とし小駕を以て天神を祭り、遂に平城を發し、東道に出で黑山に向ひ、平陽王長孫翰は西道により大娥山に向ひ、共に柔然の可汗庭に會せんことを期す。五月、沙漠の南邊に達し、輕騎兼馬副馬をケルレ伴ふ也栗水ン河に至る。大檀の民西奔す。大檀の弟匹黎*、先に東部を管領す。大檀の下に赴かんとして翰の軍と遇ふ。翰、騎を縱ち之を撃ち、其大人數百人を殺す。大檀之を聞き震怖、其宗黨を將ゐ、廐舍を焚燒し、絕迹西走し、至る所を知るなし。於是、部落四散、山谷に竄伏し、畜産野に滿ちて人の收視するなし。太武帝栗水に沿ひて西行し、漢將竇憲の故壘を過ぐ。六月、帝、兔園水フンヅラ河に次す。平城を去ること三千七百里。於是、軍を分ちて搜討。東は瀚海バイカに至り西は張掖水に接し、北は燕然山を渡り、東西五千餘里、南北三千里、凡そ獲る所の戎馬百餘萬匹、俘虜畜産車廬は山澤に瀰漫し無慮數百萬。且つ高車族にして柔然族人を殺して魏に歸降せるもの前後三十餘萬落に及ぶ。帝、弱水客老沿ひて西行し涿邪山杭愛山脈支出の山に至る。魏の諸將伏兵あるを慮り帝に勸め

て軍を班し、秋七月黒山に還る。後柔然の降人あり、
「大檀先に病に罹りなす所を知らず、乃ち穹廬を焼き
車に載り數百人を將ゐて山に入り南走し、民畜窘聚、
人の統領するなし。魏の追兵至らず、乃ち徐ろに西
遁北史傳四、遁に作る、免るを得たり」と言ふ。後又涼州の賈胡
の言を聞けるに「もし更に前行二日なれば盡く之を滅
せしならん」と。帝深く之を恨む。

八月、帝還りて漠南渴侯山に至る。東部高車、已尼
陂に屯し人畜甚だ多し魏軍を去ること千餘里なりと聞
く。將に左僕射安原等を遣して之を討たんとす。司徒
長孫翰・尙書令劉潔等帝を諫めしも、帝聽かず、乃ち
原等を遣し又新附の高車を發す、合して萬騎。已尼陂
に至る。高車諸部、軍を望んで降る者數十萬落、馬牛
羊を獲ること亦百餘萬。冬十月、帝平城に凱旋し、柔
然、高車新附の民を漠南三千里に列置し耕牧せしむ。

東は濡源に至り西は五原陰山におよぶ。司徒平陽王長
孫翰・尙書令劉潔・左僕射安原・侍中古弼に詔して之
を鎮撫せしむ。是より魏の國內、馬牛羊の價賤く氍皮
の類堆積するに至る。崔浩・高車・安原・古弼・長孫翰・衛蘇
問大肥諸傳及食貨志・天象志三・禮志

柔然衰弱、大檀疾を發して死し、子吳提立つ、勅連

可汗と號す。***

* 天興二年道武帝三駕の鹵簿を定む、其三に曰く小駕。屬
車十二乘（禮志四）

* * 皇興元年以後魏に朝貢した契丹等東北諸部中に匹黎部
あり匹黎は此部族の酋長なりしものか

* * * 傳に曰く神聖也と。白鳥・藤田博士（各上掲書）は
天・神の義なる蒙古語（ᠰᠡᠨ）に比定す。

神鼎三年（吳提 二年・四三）

○新附の高車、魏の將吏に侵奪せられ皆怨言を出し
牛馬草に飽かばまさに漠北に亡歸せんと。劉潔・安原
等奏して黄河の河水の未だ解けざる間に之を河西河套
に徙し北遁を防がんと。太武帝曰く「然らず、此等習
俗、放散日久し、園中の鹿の如く、急なれば則ち衝突
し、之を緩すれば則ち定る。吾自ら之を處するの道あ
り、徙を煩はさず」と。潔等固く請ふ。乃ち三萬餘落
を河西に遷す。新民驚駭、皆曰く「我を河西の内に圍
す、是將に我を殺さんとする也」と。涼州に走らんと
す。劉潔・古弼は五原河北に屯し、安原は悅拔城北に
屯し、以て之に備ふ。三月、高車千餘家數千騎北走、
潔等之を追ふ、逃者糧絶え相枕して死す。夏四月、萬
餘落また叛走、尙書封鐵追ふて之を滅す。劉潔・
古弼傳

○十一月、太武帝、夏をうつ。魏の高車兵、赫連定二萬の軍を馳撃し、斬首數千級古弼傳

神鼎四年（吳提 三年・四三）

閏六月、柔然可汗吳提、魏に遣使朝獻す。是より先、魏北邊の候騎、吳提の偵邏者二十餘人を獲。太武之に衣服を與へて遣歸す。吳提上下感悅せしを以てなり。

十月、帝、漠南に幸す、十一月、北部高車の莫弗庫若干其部數萬餘騎を率ゐ鹿數百萬を驅つて行在所に詣る。帝よつて大狩以て從者に賜ひ、中書侍郎鄧頴に命じて文を作り漠南に刻石功を紀す鄧淵傳、

*「後魏書北史本紀皆作勅勒、鄧淵傳皆作高車、即勅勒別名也。」〔通鑑攷異卷五〕、高車が勅勒の別名なることは、高車傳にも明文あり、疑なし。

延和元年（吳提 四年・四三）

六月、帝北燕を伐ち、左僕射安原・建寧王崇等をして漠南に屯せしめ、以て柔然に備ふ。安原傳・明元六王傳 七月

幽州の民及び密雲の丁零族萬餘人を發して北燕攻撃の具を運ばしむ奚斤傳

延和二年（吳提 五年・四三）

○二月、懷荒鎮*下の高車諸莫弗高車の酋帥を莫弗（バガツールⅡ勇士）と云

鎮將郎孤を殺し叛す。初め陸侯、鎮將たり。莫弗等其嚴急無恩を帝に訴ふ。帝、陸侯を徵還し郎孤を以て之に代ふ。侯、帝に云ふ「二年たらずして郎孤必ず敗れ、高車必ず叛せん」と。帝怒る。茲に於て果して然り。帝、驚きて其故を問ふ。侯曰く「高車上下の禮を知らず、之に臨むに威を以てし、之を制するの法を以てすべし。然らざれば必ず叛に至る」と。陸侯傳・通鑑宋紀四

是頃、魏、北邊の守として境上に五原（後の懷朔）、懷荒等六鎮*の設置を完し、征北大將軍來大千をして此六鎮を巡撫し以て寇虜を防がしむ。來大千傳 地形志

* 魏代六鎮といふ名は多く見られるが、之は普通沃野・懷朔・武川・撫冥・柔玄・懷荒の六を指す場合が多い〔元和郡縣志卷四・沈荃「六鎮釋」・俞大綱「北魏六鎮考」〕。懷朔・懷荒の二鎮が既に此延和二年には設置されてゐたことは、この二月の懷荒歷下高車の事件、及び魏書地形志朔州の條の記載によつて明かであるが、多くの事情より考察して他の四鎮沃野・武川・撫冥・柔玄も延和中の設置にかゝることは充分推察される。これら六鎮の位置については〔濱口重國氏「正光四五年の交に於ける後魏の兵制に就いて」〕〔東洋學報二二〕を參照すべきであらう。

延和三年（吳提 六年・四三）

二月、帝、西海公主を以て敕連可汗吳提に妻す。又

可汗の妹を納めて夫人となし、進めて左昭儀となす。
 頽川王提・望都公頽等を遣し往いて之を迎へしむ。可汗、其異母兄禿鹿傀及左右數百人を遣して妹を送り并せて馬二千匹を獻す。帝大悅班賜甚だ厚し又國中に詔して從來柔然其他との戰鬪によりて極めて疲弊せる民力を休養すべきことを命ず。神元平文子孫列傳 道武七王列傳

多十月、柔然、魏に遣使朝貢。

* 二月戊寅詔曰朕承統之始群凶縱逸四方未賓所在逆潛蠅蠕陸梁於漠北鐵弗肆虐於三秦是以肝食忘寢抵常扼腕期在掃清逆殘寧濟萬宇故頻年屢征有事西北運輸之役百姓勤勞費失農業遭離水旱致使生民貧富不均未得家給人足或有寒窮不能自贍者朕甚愍焉今四方順軌兵革漸寧宜寬徭賦與民休息其令州郡縣隱括貧富以爲三級其富者租朕如常中者復二年下窮者復三年刺史守宰當務盡平當不得阿容以罔政治明相宣約咸使聞知

太延元年（吳提 七年・四三）

二月柔然、魏に遣使朝獻。

夏五月、龜茲・疏勒・烏孫・悅般・渴槃陁・鄯善・焉耆・車師・粟特等の西域諸國、使を遣して魏に來獻す。帝、行人王恩生・許綱等二十輩を西域に遣す。恩生等流沙タルムの沙漠こゝでは車に出で、高昌ツルフに師即ちトルファンの東方

至らんとして柔然の捕ふる所となる。恩生、可汗吳提に見ゆ。節を持し、屈せず。帝聞きて吳提を切責す。吳提、恩生等を放還せるも、遂に西域に達せずして還西域傳總序、同車師之條等、高昌傳

* 魏の西域經營は當然柔然のそれと利害相反し、且つ烏孫・悅般の如き反柔然的國家と魏との通交は柔然の西面を脅かすものであり、柔然・魏兩國間の爭鬪を再開せしむる原因となつた。（但、以下柔然と直接關係あるものの外西域諸國の事件は本表に收載せず。）

太延二年（吳提 八年・四三）

○二月、魏、使者十餘輩を高麗東夷諸國に遣し之を詔諭す。

八月、又使者六輩を西域に派遣す。高車國、魏に遣使朝獻。

是歲柔然、魏と和親を絶ち魏邊を侵す。魏、赫連の舊地に高平、薄骨律鎮を置き甘肅省方面の固とす地形志

* 是等は何れも燕に通謀せざることを諭告したものであらうが、柔然にとつては西域の場合と同様、東面の脅威となるもので、魏との鬪争を再開せしむる原因となつたと考へられる。

** 高車が柔然或は魏の支配下より脱して一の獨立的勢力を樹

立したのは、大體魏の孝文帝時代である。こゝに高車國とあるのは、恐らく柔然配下の一部族が竊に魏と交通したのであらう。

太延三年（吳提 九年・四三）

○二月、高麗、契丹國魏に遣使朝獻す。

○三月、龜茲・悅般・焉耆・車師・粟特・疏勒・烏孫・渴槃陁・鄯善諸國各々遣使、魏に入貢す。

太延四年（吳提 十年・四三）

夏五月、帝五原に行き、秋七月、五原より、北柔然を伐つ。樂平王丕・河東公賀多羅は十五將を督して東道に出で、永昌王健・宜都王穆壽は十五將を督して西道に出づ。帝は中道に出で浚稽山に至つて更に中道を分ちて二となし、陳留王崇は大澤より涿邪山を越え、帝は浚稽山より天山に向ひ、白阜に登り刻石、行を記す。柔然を見ずして還る。柔然萬騎を以て追尾す。健數十騎を以て之を撃退す。然れども時に漠北大旱、水草無く、魏の軍馬多く死し、八千に及ぶ。

浩傳・通鑑宋紀五

* 傳には涿邪山に向ふとのみあるが、明元六王列傳の永昌王健・陳留王崇の傳には涿邪山を越ゆとある。

** 百衲本・監本北史蠕蠕傳は子阜（通志亦同）・毛本同傳は子阜に作る。今、魏書傳に據る。

*** この北征は魏の失敗に了つたと思はれる。西域傳には吳提がこの戰役について、沮渠氏に「魏の天子自ら來つて我を伐ちしも、士馬疫死し、大敗して還れり」と説き、又西域諸國に「魏すでに削弱、今天下、唯我強たり、もし更に魏使あるも復た恭奉する勿れ」と稱したとある。若干誇張の嫌あるも、兎に角此役に魏軍が成功しなかつたことを示すものであらう。崔浩傳によると、浩は此役のことを「往年北伐、剋獲せずと雖、實に損する無し、當時征行の軍馬三十萬匹、道中死傷せるものを計るに八千に滿たず。毎歳の羸死、恒に萬を減ぜず」と辯じてゐるが、國家一年の常例死亡の外に一舉に八千匹を失ひ、得る所無かつたのであるから、矢張り失敗といはねばならぬ。

太延五年（吳提 十一年・四三）

可汗吳提、沮渠牧犍に「去歲魏天子自ら來つて我を伐しも、士馬疫死し大敗して還る。我、其長弟樂平王丕を擒ふ」と説き、又使者を遣して西域諸國に告げて「魏已に削弱、今天下唯我強たり、爾後魏の使者あるも恭奉する勿れ」といふ。於是西域諸國また魏に貳し沮渠牧犍魏に服事すること慢情西域傳。太武帝之を聞き沮渠を撃たんことを議す。群臣去歲柔然征討に於ける

士馬疲弊の未だ恢復せざること等を擧げて止めしも、帝崔浩の、寧ろ其の我が衰耗を侮り備へざるをうつべしとの意見を是とし、六月、遂に沮渠牧犍の十二罪を唱へ親しく軍を率ゐて西征す。其第六罪に牧犍が、北叛虜（柔然）に託せるをせむ。又大將軍長樂王嵇敬・輔國大將軍建寧王崇等二萬人は漠南に屯し柔然に備ふ。

九月、可汗吳提、沮渠牧犍より救援を求められ、魏に侵入す。初め帝進發するに當り侍中宜都王穆壽に太子の輔佐を託し、且つ飭して曰く「沮渠牧犍、吳提と連和す、今、朕が涼州を征するを聞かば必ず來つて犯塞せん。もし兵を漠南に伏さば、之を殄する易し。收穫訖らばすなはち要害に分伏して以て虜の至るを待つ可し。引きて深入せしめ、然る後之を撃たば之を擒にせんこと必せり」と。壽、卜筮の言を信じ、吳提來らずとなし、備をなさず。吳提、其兄乞列歸を留めて嵇敬、建寧王崇等と相對峙せしめ、自ら精騎を帥ゐて深入、善無七介山に至り、候騎京師に至る。平城大駭、爭ふて中城に奔る。穆壽なす所を知らず、太子に避けて南山を保たんことを請ふ。皇太后氏寶聽かず、司空長孫道生、張黎等に命じて之を吐頽山に拒がしむ。會々

敬崇等乞列歸を陰山に破り、乞列歸、其伯父他吾無鹿胡及將帥五百人を獲へ斬首萬餘級。吳提之を聞きて遁走す。道生之を追ひ漠南に至りて還る。穆壽傳盧永胡沮渠傳皇后列傳天

象志三・公孫質傳・張黎傳

魏、沮渠氏を滅す。於是、平涼の雜胡阿史那氏五百家を以て柔然に奔り、服事して其鍛奴鐵工となり、金山の陽に住む。即ち突厥の祖なり。北史・隋書突厥傳

* 樂平王丕が柔然に捕へられしことは他に見えぬ、不は其後貞君四年の北征に従軍し、劉潔不軌の事に坐し愛死してゐるから、之は吳提の妄言であらう。

* 天象志は黎敬に作る。今、本紀に従ふ。

* 突厥族發祥に關しては數個の傳説が當時よりあつたが、之は其一である。

眞君二年（吳提 十三年・四四）

三月、魏さきに捕へし所の郁久閭乞列歸を朔方王に封ず。

眞君三年（吳提 十四年・四四）

伊吾王唐契、魏に款を通ず。泰常八年（四二）三之條參照 柔然之を攻む。契、部落を擁して高昌に奔り其地を奪はんとす。柔然部帥阿若騎を率ゐて自署高昌太守闕爽を救ひ

契を殺す。高昌傳、唐和傳、沮渠傳、宋書氏胡傳、梁書諸夷傳、高僧傳初集卷十三、

九月、沮渠無諱、高昌を攻取し、是に據る。闕爽、柔然に奔る。

十月、柔然、宋に遣使、方物を獻す。宋書文 宋、北

魏牽制のため之を羈縻す。宋書芮芮傳

* 宋書氏胡傳、闕を闕に作る。今、後魏書梁書の記載に従ふ。闕爽は蓋し、後の闕伯周の一族と考へられる。

眞君四年（吳提 十五年・三四）

○三月、烏洛侯國遣使魏に朝貢。其國の西北に魏の祖宗の舊廟石室あり、南北九十步東西四十步高さ七十尺、室神靈あり、民多く祈請すと稱す。中書侍郎李敞其地に派遣せられ、天地を祭り、祖宗を配祀し祝文を壁に刻して還る。烏洛侯傳禮儀志

九月、帝漠南に行き輜重を捨て輕騎を以て柔然を襲ふ。* 軍を四道に分ち、樂安王範、建寧王崇は各々十五將を統して東道より出で、樂平王丕は十五將を督して西道より出で、帝は中道より出で、中山王辰は十五將を領し中軍となつて後繼す。帝、鹿渾谷ノウゲイに至つて吳提と相遇す。柔然部落惶怖擾亂す。太子晃、帝に言つて曰く「今大軍にはかに至る。宜しく速に進撃す

べし、其不備を襲はば之を破らんこと必せり」と。時に尙書令劉潔、さきに己の計の用ひられざるを恨み、** 諸將を沮誤せんと欲し、矯詔して期を更めしを以て諸將未だ鹿渾谷に到らず。且つ固く諫めて「賊の營中塵盛なり、其衆必ず多からん、出で、平地に至らば、恐らくは包圍せられん、諸軍の大集を待つて、之を撃つにしかず」と。晃曰く「塵の盛なるは、軍士驚怖擾亂の故也」と。帝疑ひて急撃せず。帝止ること六日、諸將至らず、吳提遠遁。之を追ひて頰根河オルホに至り二萬騎を虜す。オルホンの北なる石水トホに至つて還る。既にして柔然の候騎を獲たるに曰く「柔然、魏軍の至るを知らず、上下惶懼、衆を引いて北走す。六七日を経て追者無きを知り、始めて徐行せり」と。帝聞きて深く之を恨む。

初め帝、司馬楚之ホ盧中山等をして別に兵を領して運糧を督し大軍に繼がしむ。時に鎮北將軍封沓、柔然に亡降し、** 柔然に説いて楚之等をうつて糧運を絶たしむ。楚之豫知して、能く之を防げり。然れども魏軍歸途漠中に次し糧盡き士卒多く死す。且つ劉潔、陰かに人をして軍を驚動す。十二月、帝平城に還る。劉潔・崔浩・司馬

楚之・奚谷・薛辨傳・世
祖紀恭宗附紀・天象志三

此役魏軍、死するもの十に六七、帝、死家の哀を發
することを許さず、犯者は之を誅す。宋書索
虜傳

* 此の征行に先だち太武帝は崔浩にその可否を問ひ、浩は
「夫北土多積雪、至冬時、常避寒南徙、若因其時潛軍而出、
必與之遇、則可擒獲」と云ひ、帝然りとなしたのであつて
「崔浩傳」、秋冬の候に潛かに急襲するのが魏に有利であつ
たことがわかる。又獻文帝時代、常に魏は毎年秋冬に軍を
出して漠南に屯し、柔然に備へ春分に至つて引き揚げるを常
としたのかもゝる關係からであつたと思はれる。

* * 初め劉潔は此北伐に反對で、帝に「虜非有邑居、遷徙
無常、前來出軍無所擒獲、不如廣農積穀、以待其來」と説
いたが、帝に容れられなかつたのを恨んだのである。又潜
かに廢立乃至篡奪を謀つてゐたと傳へられる。「劉潔傳」

* * 漢代漢民にして匈奴に亡入する者が多かつた様に、
魏人で柔然に亡ぐる者も少くなかつたと想像される。明元
帝の初、侍臣受斤が刑を逃れて柔然大檀の下に奔つたなど
は其一例である。「尉眷傳」

眞君五年（吳提 十六年・處可汗吐賀眞即位元年・四四）

二月、魏、中山王辰・内都坐大官薛謹・尙書奚谷等
八將を都南に斬る。去秋北伐、期に後れたるを以ての
故なり。奚谷・薛辯傳
天象志三

九月、帝漠南にゆき、可汗吳提を襲はんとす。吳提
遠遁、乃ち還る。

吳提死す。子吐賀眞^{*}立ち、處可汗^{**}と號す。

* 魏人は又之を「害眞」の文字を以ても寫した。「宋書索虜
傳」。

* * 傳に曰く唯也と。白鳥・藤田博士（上掲書）は之を蒙
古語 ^{ᠤᠤ}（然りの意）の音譯となす。但、通鑑は之を處羅
可汗とす。

眞君六年（吐賀眞 二年・四四）

八月、帝陰山の北にゆき廣德宮<sup>帝殿を陰山の北に起
す、殿成りて楊難當來</sup>
朝、因て命じて廣德
宮といふ（世祖紀下）に次し、全國の兵三分の一を發し、
戒嚴以て後命をまたしめ、又諸種の雜民五千餘家を北
邊に徙し畜牧、沙漠に至らしめ、以て柔然を誘ふの餌
とす。

眞君九年（吐賀眞 五年・四四）

六月、悅般國<sup>秦常八年
之條參照</sup>魏に使を遣し、東西より柔然

をうたんことを提議す。帝之を聽き、八月、諸軍に詔
し戒嚴、九月陰山にゆき、十二月、北伐、臨淮王他^{*}
を前鋒とし受降城に至る。柔然を見ず、因つて糧を城内
に積み、戍を置いて還る。西域傳・道武七王
列傳・天象志三

* 西域傳、淮南王に作る、今、道武七王傳によりて改む。

眞君十年（吐賀眞 六年・^{四四}九）

正月、帝北伐、高涼王那^{*}は東道に出で、略陽王羯兒は西道に出で、帝及太子は中道より涿邪山に出づ。可汗吐賀眞の別部帥介綿他拔等其部落千餘家を率ゐて來降。是時軍行くこと數千里、吐賀眞新に立ち、恐懼遠遁す。三月、帝平城に還る。

九月、帝北伐、高涼王^{*}那は東道に出で、略陽王羯兒は中道に出で、諸軍と地弗池に會せんことを期す。吐賀眞、柔然の精兵を悉し、軍資甚だ盛、那を圍むこと數十重。那長圍を掘り堅守相持すること數日。吐賀眞屢々挑戰、すなはち那の破る所となる。那の衆が少く而も固きを以て、大軍まさに至るものと疑ひ、圍を解いて夜去る。那、軍を引いて之を追ふこと九日九夜吐賀眞益々懼れ、輜重を捨て、穹隆嶺を踰えて遠遁す。那、其輜重を收め、軍を引いて還る。帝と廣澤に會す。略陽王羯兒は盡く其人戸畜産百餘萬を收む。^{天象志三}

是より柔然衰弱、吐賀眞遠遁し、魏邊を侵さず。

* 蠕蠕傳高昌王となすは誤、今、神元平文諸帝子孫列傳によりて改む。

眞君十一年（吐賀眞 七年・受羅部眞可汗予成即位元年・^{四五}〇）

二月、可汗吐賀眞死し^{宋書索虜傳}予予成立つ。^{*}受羅部眞可汗と號す。

六月、沮渠安周、柔然の兵を引き三道より車師城を攻めて之を奪ふ。其大帥車伊洛等魏の焉耆鎮に奔る。

^{車伊洛傳・通鑑宋紀七}

七月、宋、魏の南邊を攻む。柔然、使を宋に遣し持角をなさんことを誓ふ。^{宋書索虜傳}

九月、魏帝軍を率ゐて南宋をうつ。太子晃漠南に屯して柔然に備ふ。

○眞君以來、庫莫奚、契丹歲々魏に朝貢せんと乞ひ、以後太武文成獻文の世歲々名馬文皮を致す。^{庫莫奚契丹傳}

* 蠕蠕傳、和平五年吐賀眞死、子予成立とあるが、宋書索虜傳に見ゆる宋元嘉二十七年（眞君十一年）に太武帝が宋に送つた書に「彼往日北通芮芮（柔然）、西結赫連、蒙遜、吐谷渾、東連馮弘、高麗、凡此數國我皆滅之、以此而觀彼豈能獨立、芮芮吳提以死、其子菟害眞（即ち吐賀眞）、襲其凶迹、以今年二月復死、我今北征、先除有足之寇」とあつてこの年二月に吐賀眞が死んだことは明かである。尙予成、通典子成に作る、今、魏書北史傳に據る。

* 傳に曰く魏言惠也と。白鳥博士（上掲書）は受羅を以て滿洲語の *djilakan*, *djilun*, *dsilasuka* (可憐の義)、又女眞語の只刺興（憐憫）、只刺理（憐む）等と同語であらうとなし、藤田博士（上掲書）は之に反し受羅は好運天惠福徳の義を有する蒙古語 *no. nui* であり部眞は仁徳・慈惠の義を有する蒙古語 *buin* であらうとした。但し藤田博士は更に一説として受羅部眞は *no* に *bei* なる語尾、（事物に用ゆる蓋又は箱を示す語尾）を附した *no. bei*（天惠を保するもの）の音譯であつたやも知れずとなした。

興安元年（予成 三年・四五）

十一月、文成帝の生母閼氏柔然郁久閼氏卒す。

* 初め世祖の世、柔然人郁久閼氏魏に降り河東公に封ぜらる〔太安二年王に進む〕。閼氏は其妹にして少くして選ばれて東宮世祖の太子晃に入り文成を生む〔閼氏傳・皇后列傳〕。皇后列傳に世祖末年薨とあるは誤。世祖の殂せし正平二年三月とは同年なるも、其數ヶ月後なる興安元年十一月に卒せしなり。

興安二年（予成 四年・四五）

○十二月庫莫奚・契丹魏に遣使入貢。

興光元年（予成 五年・四五）

○九月庫莫奚國、魏に名馬を獻ず、一角あり、狀麟の如し。

十一月、北鎮の將房杖は柔然を撃ち其將豆渾與句等を虜し馬千餘匹を獲。

是頃魏は每歲秋冬軍を遣し、三道並出で、柔然に備へ春中に至つて師を班す源賀傳。秋冬は柔然寒を避けて南下するを以てなり*。

* 眞君三年（四四二）之條註參照。

太安二年（予成 七年・四五）

八月魏の將尉眷伊吾を撃ち大獲して還る尉眷傳。伊吾は柔然の西域進出の前進基地にして、尉眷は之に痛打を加へしものと考へらる。

泰常八年（四二三）眞君三年（四四二）參照。

九月河東公閼氏、其弟零陵公閼紇並びに爵を進められて王となる。外傳

○十一月囁噠ユフタル國魏に遣使朝貢、（以後毎に遣使

貢獻）西域傳

太安三年（予成 八年・四五）

正月フン族なる粟特國* 魏に遣使朝貢。さきに魏が沮渠を亡せる時、姑臧に居て魏軍に擒へられたる同國の商人を贖ひかへさんことを請ふ。西域傳

* 粟特國は歐羅巴に侵入せる匈奴（フン）の後裔がクリミア

半島に邦せるものにして、粟特は其 Sagdak なる地名を寫せるもの。又魏書西域傳に其王忽倪とあるは、aula の末子 Hernak の音を寫せるものにはかならぬ。

(Fr. Hirth, Über die Wolga-Türnen und Hing-nu. [Stzb. d. Akad. d. Wiss. in München. phil.-hist. kl. 1899]; Mr. Kingsmill and the Hing-nu [The Journ. of the American Oriental Soc. Vol. XXX. 1909] 拙著「匈奴西移年表、第六節」〔東洋史研究二ノ一參照〕。尙、同國は魏朝にこの前後に都合九回の入貢をしてゐる。

太安四年(予成 九年・四五)

十月文成帝柔然を伐たんと欲し陰山に至る、寒雪に遇ひ還らんとす。太尉尉眷諫めて曰く、今大衆を動して北敵を威す、都を去る遠からずしてすなはち還らば虜必ず我内難ありと疑はん、まさに寒雪兵民勞苦すと雖、進まざる可らずと。帝之に従ひ遂に沙漠を渡る。

騎十萬、車十五萬輛、旌旗千里。柔然遠遁、其莫(帥)烏朱賀顔庫世顔衆數千落を率ゐて降る。乃ち車輪山に於て累石功を紀して還る。尉眷傳

文成帝、北征の後、意休息にあり、柔然も亦北遁、敢てまた南侵せず。

和平元年(予成 十一年・四六)

柔然、高昌主河西王沮渠安周を攻め沮渠氏*を滅し、關伯周を高昌王とす。高昌の王を稱す之より始まる。

高昌傳、盧水胡沮渠牧犍傳・周書異域傳下

* 太延元年。眞君三年(四四二)之條參照。無論、眞君五年死し弟安周が代立したのであつた。柔然が、西域一帯に勢力を有してゐたこの沮渠氏を排したことは、やがて西域一帯が柔然の勢力範圍下に入つて來ることを示すものである。

和平四年(予成 十四年・四六)

六月柔然、宋に遣使方物を獻す宋書孝武帝紀

和平五年(予成 十五年・「永康元年」・四六)

可汗予成、年號を立て永康元年と稱す。*率部南侵す。秋七月、魏の北鎮の游軍之を大破す。

○同月、帝河西に幸し、高車五部相聚りて天を祭る。衆數萬、走馬殺牲。帝之に臨幸、高車大に欣悅す。〔高車傳〕。

* 蠕蠕傳に此年吐賀眞死、予成立とあるの誤なるは既述の通りである〔眞君十一年之條參照〕。

皇興元年(予成、永康四年・四六)

○二月、庫莫奚・具・伏弗郁・羽陵・日連・匹黎・余等東北諸部族魏に獻使朝貢。

皇興二年（予成 永康五年・四六八）

○四月、庫莫奚・契丹・具・伏弗郁・羽陵・日連・匹黎・尔・叱六手・悉萬丹・阿大何・羽眞侯*、魏に入貢。

初め契丹の莫弗訖何辰、魏に入朝奉獻、班饗を諸國の末席に得、歸つて魏朝の美を謂ひ忻慕す。於是、具・伏弗郁・悉萬丹部等東北諸部各其名馬、文皮を以て入貢、遂に和龍密雲の間に於て常に交市するを許され、以後貢獻絶えず。契丹傳

○十二月悉萬丹等諸部又各遣使魏に朝貢。

*これら諸部の名稱は、契丹傳には、悉萬丹部・何大何部・伏弗郁部・羽陵部・日連部・匹黎部・黎部・吐六于部とある（遼史亦これに據つて是等を契丹の古八部としてゐる）に反し、同勿吉傳には具佛伏國匹黎余國拔大何國郁羽陵國羽眞侯國とあつて、既に魏書（乃至北史）編纂者も眞の族名を知らず、原史料に連書された諸部名を任意勝手に想像を以て切りつぎしてゐることが解る。従つてこれら部族名の眞の讀み方は不明であるが假りに斯様に切つて置いた。尤も匹黎部とあるのは、大檀の弟で東部を領してゐた匹黎と連關あるものと考へられる様に、（神䴥二年四二九參照）尙若干考察によつて之を明かにし得るものもないではないが茲では觸れぬ。

皇興三年（予成 永康六年・四六九）

二月柔然・庫莫奚・契丹・朝貢。七月柔然國又遣使朝貢。

皇興四年（予成 永康七年・四七〇）

○二月、庫莫奚・契丹遣使朝貢。

八月柔然、邊を侵す、尙書右僕射元目辰呂羅漢傳目辰に作る否也曰く「若し車駕親行せば、恐らくは京師危懼せん、持重固守に如かず。虜、懸軍深入せば糧の繼運なく、自退久しからじ。將を遣し追撃せば之を破らんこと必せり」と。給事中張白澤曰く「若し變興親動せば賊必ず靡を望んで崩散せん、なんぞ神兵を抑挫し、坐して敵を縦にすべき」と。帝之に従ふ。即ち京兆王子推・東陽公元丕は諸軍を督して西道に出で、任城王雲等は軍を督して東道に出で、汝陰王賜、濟南公羅烏拔は軍を督して前鋒となり、隴西王源賀は諸軍を督して後繼たり。諸將、帝と女水の濱に會す。帝親しく衆に誓ひ諸將に詔して曰く、「用兵は奇に在りて衆に在らず、卿等朕の爲に力戰せよ、方略すでに朕が心に在り」と。乃ち精兵五千人を選び戰を挑み、多く奇兵を設け以て之を惑す。柔然の衆奔潰、北ぐるを逐ふこと三十餘里、斬首

五萬級降者萬餘人。戎馬器械はあけて數ふべからず。十九日にして往返す六千餘里なり。女水を改めて武川となす。武川鎮に於て此行に従ひたる學者高允は「北伐頌」を上げる。帝覽て善しとなし、遂に石に刊して功を紀せり。張亮傳・景穆十二王列傳中・高允傳柔然の降者を高平薄骨律鎮に置く楊椿傳

是頃、柔然は焉耆、鄯善・龜茲・姑墨の西域諸國を役屬せるが宋書索虜傳芮芮條是歲、更に于闐に寇す。于闐之を患ひ、使者素目伽を魏に遣し上表して曰く「西方諸國、今皆すでに蠕蠕に屬す*。奴、世々大國を奉じ、今に至るも異る無し。今蠕蠕の軍馬城下に到る。奴、聚兵自固す、故に遣使奉獻し、救援を延望す」と。獻文帝公卿に之を議せしむ。公卿奏して曰く、「于闐京師を去ること幾萬里。蠕蠕の性野掠に習ひて攻城によからず。もし拒ぐ所あらば、まさに已にかへりしならん、師を遣らんと欲する、勢及ぶ所無し」と。帝、議を以て使者に示し、且詔して一二歳の間、親しく柔然をうつて于闐の患を除くべしと約す。西域傳

* 北伐頌、蠕蠕傳北征頌に作る、今、高允傳に従ふ。其詞に曰く「皇矣上天降鑒惟德眷命有魏照臨萬國體化丕融王猷

允塞靜亂以威穆民以則北虜舊隸稟政在蕃 因時逃命北轅世襲凶軌背忠食言招亡聚盜醜類實繁敢率犬羊圖縱猖獗乃詔訓師興戈北伐驅馬褭糧星馳電發撲討虔劉肆陳斧鉞鉞斬陳賊剪厥旅積骸填谷流血成溝元凶孤奔假息窮蹙爪牙既摧腹心亦阻周之忠厚存及行葦翼聖明有兼斯美澤被京觀垂此仁旨封尸野獲惠加生死死蒙惠人欣復育理貫幽冥澤漸殊域物歸其誠神猷其福遐邁斯懷無思不服古稱善兵歷時始捷今也用師辰不及浹六軍克合萬邦以協義著春秋功銘玉牒載興頌聲播之來葉」〔高允傳〕

* 于闐即ち和闐地方に迄も柔然の攻撃力が及んだのであるから、當時に於ける柔然のタリム地方支配の強力であつたことは、此の上表の云つてゐる通りであつたと思はれる。

延興元年（予成 永康八年・一四七）

○四月西部勅勒高車叛す。（初め殿中尙書胡莫寒、西部勅勒の豪富兼丁者を簡みて殿中武士となす、而して大いに財貨を納めて簡選公平ならず、衆怒つて莫寒及び高平假鎮將奚陵を殺し遂に叛す）帝、汝陰王天賜・給事中羅雲に詔して之をうたしむ。前鋒の勅勒詐り降る。雲覺らず、遂に勅勒の輕騎數千の襲殺する所となる。死者十に五六。天賜僅に逃る。景穆十二王傳 羅結傳源賀傳

○十月、魏の河西勅勒叛す。太尉源賀之をうち、二

千餘落を降し、餘黨郁朱于等を追撃して、枹罕に至り、大いに之を破る。斬首五千餘級^{*}、男女萬餘口雜畜三萬餘頭を獲。また統萬上邽高平三鎮の叛勅勒を追ひ金城に至り斬首三千級。魏、殘黨を冀定相三州に徙して營戶^{北魏時、雜戶と併稱とす。源賀}されし一種の官賤戸とす。

^{*} 高祖紀、三萬餘級とせるは誤か。通鑑が之を八千級としてゐるのは金城に於けるのと通算せしものと考へられる。これらの勅勒は何れも太祖・世祖時代に魏に降つた高車の裔に外ならない。

延興二年（予成 永康九年・四七）

○正月統萬鎮胡民^{匈奴及鮮卑系と思はる}相率ゐて北叛。寧南將軍交趾公韓拔等之を追滅す^{天象志一}

二月、柔然魏を侵す。獻文帝、將を遣し之をうつ。柔然遁走。其別帥阿大千、十餘落を率ゐて魏に降る。東部勅勒、魏より畔き柔然に奔る。帝之を追ひ石磧に至る。及ばずして還る。

○三月連川勅勒叛を謀る。青徐齊兗四州に徙配して營戶となす。

閏六月柔然部帥无盧眞三萬騎を率ゐ塞を越えて敦煌鎮を圍む、鎮將尉多侯之を擊走す。又晋昌に寇す。守

將薛奴之を擊走す。後、尉多侯南山に獵す、柔然その部帥度拔を遣し敦煌を圍み多侯の歸路を斷つ。多侯圍を衝いて鎮に入り、遂に衆を率ゐて出戦大いに之を破り追北數十里斬首千餘級。多侯因つて上疏し、伊吾を取つて、柔然が西域に通ずるの路を斷んことを請ふ。事行はれず。^{尉多侯傳}

八月、百濟遣使上表して、高麗をうたんと請ひ、高麗王璉が南、劉宋に通じ、北、柔然と約して共に相脣齒して魏に反抗せんとし居ることを告ぐ^{百濟傳}

○地豆于、庫莫奚遣使朝獻す。地豆于、以後太和六年に至るまで貢使絶えず。^{地豆于傳}

十月、柔然魏を侵し五原に至る、十一月、獻文帝之を親討しまさに沙漠を渡らんとす。柔然北走數千里、追ふべからず、乃ち止む。

〔未完〕